

「I」ではなく「WE」の視点

2011年8月号から連載している「ファッション歳時記」は今号で最終回を迎えます。フィナーレは特別編として、このほどオープンしたアートホテル「樂土庵」(砺波市)を訪れ、理想の社会を先導する概念「新・ラグジュアリー」の視点から「豊かさ」について、中野香織さんにインタビューしました。



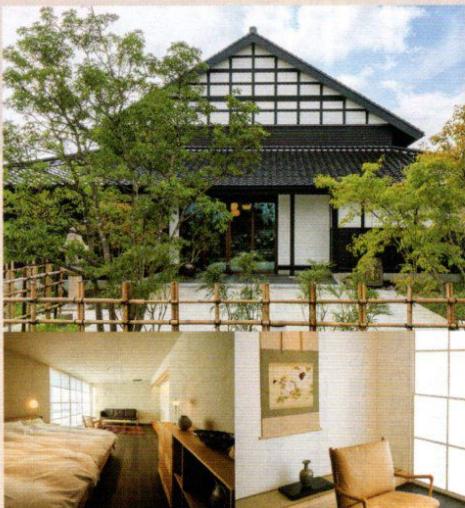
茶道のお点前でおもてなしを受ける中野さん

「ラグジュアリー」イコール「ラグジュアリーブランド」と捉える人も多いかも知れませんね。

そのようなイメージが広がったのはここ30年のことです。ラグジュアリーが富裕層対象の高級品や不要不急のぜいたく品などというのは全て偏見です。そもそもラグジュアリーは時代を導き、特有な世界観を持った文化を創造する役割を果たしてきました。分かりやすい例として「宇宙開発」が挙げられます。1960年代の宇宙開発は「食べるのにも困る人がいるのにあんなんばかなことに金を使うのか」と批判を受けながらも、「人類の夢」の実現にまい進します。そのために結集した知恵やお金、技術がドライブーズや断熱材など、今の暮らしになくてはならない日用品を生み出しました。非合理的な夢に向かい、エネルギーを一気に集めることでもたらされる文化や社会の変化はとても大きいです。

「ラグジュアリーについて、中野さんは言葉の語源から「誘惑的であり豊かさを表すものであり、光り輝く(輝かせるもの)」と定義しています。ラグジュアリーブランドに基づくラグジュアリーは旧型と位置付けていますね。

再生の滯在 散居村の美しさを後世へ



散居村に立つ築120年の伝統的家屋「アズマダチ」を生かした1日3組限定のアートホテル。運営する県西部観光社「水と匠」(高岡市)のプロデューサーで、ワタリウム美術館や水戸芸術館など長年アート業界で働いている林口砂里さんが展示品を収集した。北欧や李朝の家具に、棟方志功・芹沢銈介ら民藝作家から内藤礼など現代美術家の作品まで、上質な工芸やアートが響き合う空間となっている。別棟のレストラン「イルクリマ」では地域の野菜や米などで本格イタリアンを提供し、地元作家らの器でもてなす。併設のショップでは器を販売する。地域の自然環境の再生を目的に、宿泊料金の2%を散居村保全活動に充てるほか、観光庁の支援も受けながら地域と外部をつなぐコミュニティを開発する予定。

楽土庵

砺波市野村島645
TEL.0763-77-3315
客室3室(1部屋につき2人まで)
予約は公式サイト
(<https://www.rakudoan.jp/>)から
1人1泊3万3,000円(税込み)~。

レストラン「イルクリマ」
席=20席
ランチ、ディナーの
問い合わせはTEL.0763-77-3999
P=約10台



時代や文化によって何に豊かさを感じるかは違います。個人の状況にもよるでしょう。ビジネスでいえば、粗利益が大きいのがラグジュアリーと解釈されています。その一面は確かにありますが、その粗利益の大きさに何を込めていますか。これまでのラグジュアリーブランドは、美術館をつくるなど文化的な社会貢献をうたつてきました。しかし利益を上げて文化的なことをやるというのが旧型に当たります。例えば粗利益を大きく上げなくても職人や生産者の賃金をアップするという取り組みが新しいラグジュアリーです。既にイタリアのブルネロ・クチネリ(1953年生まれ。ファッショントランク『ブルネロ・クチネリ』を創業)が実践しています。平均よりも20%以上高い賃金を職人に与えたところ、彼らは責任を感じ自由に創造力を發揮して、とても素晴らしい物を作るのであります。結果的にアートな価値が認められ、高く売れます。本社のある村も修復され、

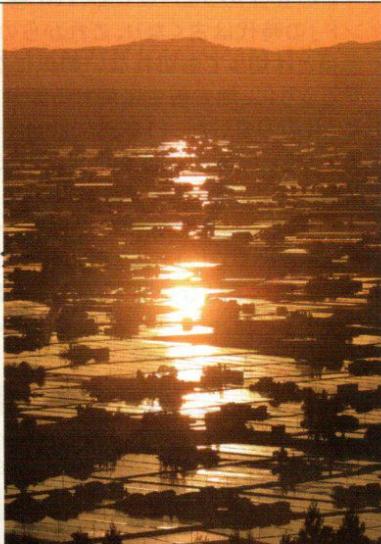
ー新・ラグジュアリーにつながる注目スポットとして「楽土庵」を訪れた印象は。

写真では伝わらない「匂い」「光」が独特で、それぞれの部屋の空気の感触が違います。その理由は土や絹、紙といった素材の特性を生かし、ラグジュアリーでアートな雰囲気に格上げしているからでしょう。古今東西の作家のアート作品と調和し、独特な空間に仕上がっています。このような宿泊施設は国内には他にないと思っています。まさしく新・ラグジュアリーの

世界観に近い場所です。

ー新・ラグジュアリーの視点から、特に共感した部分はありますか。

宿泊費の一部が地元で農業をされている方や散居村の保全に還元される取り組みでしょうか。一方的なツーリズムではなく、地域も一緒に幸せにしていこうという新たなスタイルです。良い循環を生み出そうとしていらっしゃることが素晴らしいし、500年の年月をかけて作られてきた散居村の景観は誰かが受け継が



夕日に染まる散居村

連載を終えて

楽土庵では「土徳」という言葉を知りました。土徳とは、人と自然が作り上げてきた、その土地が醸し出す品格のようなもの。散居村の風景、歴史ある建物、そしてアートなインテリアとホスピタリティ。それらが融合して生まれる「土徳」ある世界こそが、楽土庵でした。人の努力の積み重ねによってこの土地の「土徳」は保たれ、未来へと継承されていくのでしょう。

そんな楽土庵を創った人々に敬意を表すため、備後木綿の着物を着ていきました。幅広ベルトで簡単に着脱できる、カジュアルな着物です。この着物の作者も、多忙な現代生活に溶け込める21世紀型着物を提案し、日本の伝統的織物を未来へつなぐ努力をしています。

2011年8月号からスタートした連載も、134回で終わりを迎えることになりました。11年3ヶ月にわたる期間、一度も休載せず続けることができたのは、ひとえに読者のみなさまと、北日本新聞社のスタッフのおかげです。ありがとうございました。

世界が激動したこの間に、私自身の関心や活動領域も大きく変化しました。イギリス文化の研究からスタートしましたが、スーツやダンディズムの歴史の研究へと進んだ先にファッション史やモード事情へと導かれ、さらにラグジュアリー領域全般を視野に入れるようになりました。

ここ30年のグローバリズムに基づく「ラグジュアリーブランド」の時代は古くなり、これからはラグジュアリーは地域の幸福とは切っても切れない関係になります。そのような話をするうちに、地方創生に関わる国や地方の組織とも交流するようになりました。11年前には全く予想もしなかった場所に出入りし、11年前には別世界だと思っていた分野で働く人々と仕事をしています。資本の暴力による画一的な世界はもう終わり、これからは各地の土徳がラグジュアリーの必須条件となっていくでしょう。連載の最後に「土徳」に導かれたのは決して偶然ではない気がしています。さらなる新しい地平が見えます。

なかの・かおり／1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆を行なうほか、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「『イノベーター』で読むアバレル全史」(日本実業出版社)、ほか多数。最新刊は共著『新・ラグジュアリー 文化が生み出す経済 10の講義』(クロスメディア・パブリッシング)。



林口さん(左)から説明を受ける



—新・ラグジュアリーの「豊かさ」は私たちがどのような社会を実現したいかにつながります。

豊かさの解釈は変わっていくまつただ中にあります。これまで資本主義の暴走を許しきったため、経済格差や環境破壊などを生み出してしまいました。「I」の視点で突っ走ったばかりに、結局全部自分に返ってきてしまったのは皆さんさすがに痛感していると思います。これからは自分・私たち・地球も含んだ「WE」の視点で考えることが大切だと思います。2015年前後にSNSが世界的に流行したことで価値観は多様化し、これまで暗黙の了解だった「上下構造」がフェアになつた方がいいという空気が広がりま

なければ壊れてしまいます。昔のままではなく、水と匠プロデューサー・林口砂里さんのアート業界での経験も合わせて、次世代が好ましく受け取れるような形でつないでいます。

—日本の現状はどうでしょうか。

全体的にはまだまだだと感じています。一部の目覚めた人々はやゆされる段階です。しかし新しい波が起きる時には必ずあることなので、時間が経過すれば当たり前になっていくでしょう。私は現在、新・ラグジュアリーの普及活動に力を入れています。富山は期待される地域です。後押しできることがあればいくらでも応援します。「何かやろう」と思っている人たちにビッグピクチャー(大きな見取り図)を見せて、世界の状況や取り組みの位置付けなどをアドバイスすれば、動きやすくなるのではないかでしょうか。そういうことも私の役割かなと思っています。(聞き手・柳田伍絵)

した。富の格差を前提とする旧型のラグジュアリーはどんどん豊かには見えなくなっています。コロナ禍で一気にその流れは加速しています。